ねじりはちまき

9 月長月、白露秋分の月になりました。

9 月 1 日防災の日、7 日白露、15 日老人週間、21 日までです。

21 日敬老の日、22 日秋分の日となっております。

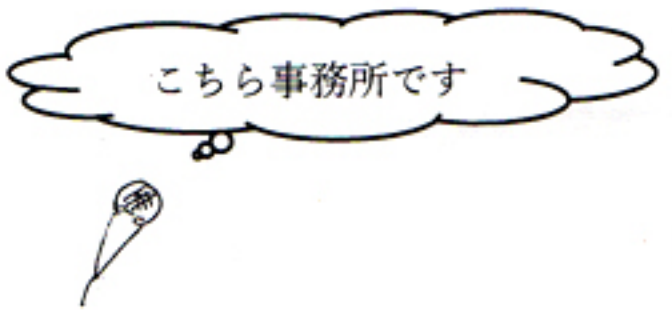
今年は雷が多いようですね。語源は神鳴で激しい音や閃光を放ち、たまには落ちることもあるので神の仕業と恐れられていました。

閃光の事を稲妻というのは稲の実る時期に多くまた雷が多いところは良く稲が育つため、稲を育てる良妻に見立てているからです。雷が多い年は豊作という言い伝えや雷が周囲の空気を植物に有益な窒素化合物が合成されるため稲がよく実るという説があります。実り多き秋になることを祈りたいですね。

季節の変わり目です。どうぞ健康には十分ご留意ください。

幸田　常一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



お世話になっております。

引き続き本宮市の現場で、水害による復旧工事をさせていただいております。

夢を見続ける男　NO７７

本宮の歴史概観

地元本宮の歴史を概観してみたいと思い、本宮町史を紐解いてみた。ここでは、概観するといっても、本宮という地名が文献に登場して以降、何処の、誰の支配下にあったのか、行政区画的にいうと今日までどのような変遷を辿ってきたのかをみてみたいと思う。

本宮という地名が最初に登場するのは、本宮城（館）のことだ。南北朝時代の興国４年（１343 年）の南朝方の文書である。南北朝の争乱はこの地にも及び、本宮城は争乱に巻き込められていたようだ。その本宮城のあった位置は現在の安達太良神社付近である。その頃の城主は不明である。そもそも本宮という地名の由来はどうか。久安２年（1146 年・平安時代末期）安達太良山の神々と名倉山の神を併せ「安達太良明神」として菅森山に遷座し、安達郡の総鎮守となったことにより、一郡の「本宮（ほんぐう）」であることから本宮の地名がうまれたという（「本宮町史」２巻通史編・Ｐ２１５）

本宮という地名ではないが、「あだたら」山は奈良時代に編纂された「万葉集」（７５９～780 年にかけて成立）に収録された和歌に歌いこまれている。その一つを紹介すれば、

陸奥の安太多良真弓弦着（つるは）けて引かば人の吾（わ）を言（こと）なさむ

南北朝時代の後、足利・室町時代に入り、陸奥国府を追われた畠山氏が、国詮の時期安達郡に安住の地を求め、二本松に根を張り、安達郡内の開発を一層進め、影響力を増していった。安達郡（西方）内の支配を確実なものとした。満詮以降本宮地方の開発が一層進むことになる。満詮が本宮城を築き、弟満奏が入城した（明徳２年・1391 年前後か）。その後（15 世紀に入って）の城主となる本宮氏は満詮を祖としているという。本宮氏は畠山氏の一族である。いずれにしても、本宮の地は、二本松畠山氏が一族の本宮氏を配置して南方西方への勢力伸長の拠点にしたのであった。

そういう経過の中でやがて、米沢に本拠を構え、伊達郡に影響力を持っていた伊達政宗の動き。二本松畠山氏の攻略を始めとし、豊臣秀吉の奥羽仕置き（天正１８年・１５９０年）までの間、福島県内をすごい勢いで席巻するのである。郡山、田村、会津、須賀川と次々と政宗に制圧されてしまう。その過程で、二本松・畠山氏をめぐって伊達軍と蘆名（会津）・佐竹（常陸）連合軍との闘いが本宮・青田原で展開される。天正１３年（１５８５年）（安土桃山時代）のことである。この戦いは「人取橋合戦」と称されている。佐竹・蘆名連合軍は畠山氏を支援して、伊達政宗軍の南下を阻止しようとしたもの。この時闘いは勝敗の決着は付かなかったが、政宗は既に本宮城に入城して戦いに臨んだという。この合戦の後、畠山氏は滅ぼされる（天正 14 年）。こうして　本宮も伊達家の支配下になる。
ところで本宮城主の本宮氏はどうなったのか。畠山氏が滅びる前の天文年間のことだが、伊達家内乱に巻き込まれ、対立した畠山氏（本家）に本宮城から追放されてしまったのである（天文 15 年・1546 年）。その後復帰は叶わなかったということだ。

さて、奥羽仕置きにより伊達氏支配下にあった二本松・本宮は誰の所領となったか。仕置きによって会津は蒲生氏郷に与えられ、その氏郷が安積・岩瀬を含め、二本松・本宮も所領することになったのである。この時点で本宮は会津・蒲生の支配下に属したのである。その後、会津領主は、蒲生から越後の上杉景勝に、この上杉もその所業が徳川家康の逆鱗に触れ、米沢に移封され、再び蒲生氏の所領となる。蒲生氏の後は伊予国の加藤嘉明氏へ、そして加藤氏の後は保科正之が出羽山形から移った。保科には会津のみ与えられ、二本松には白河から丹羽光重が移った。寛永 20 年・1643 年のことである。これで、幕末まで２００年間、本宮は丹羽氏・二本松藩に属することになる。

さて、二本松藩の下で本宮はどんな状況だったのだろうか。先ず、その頃の行政単位だが、検地によって「米の石高」が示される形で「村」が成立していた。その村は「本宮組」「糠沢組」に属していたが、村の数は「本宮組」が１３ヵ村（郡山の一部を含む）、「糠沢

組」（旧白沢村）が８か村であった。その村の名称は、戦後町村合併がなされる前の旧町村名が全部含まれている。現在の行政単位の基礎が出来上がっていたといってもいい。

街道が逐次整備されていく中で、本宮は奥州街道が通り、かつ会津街道・相馬街道・磐城街道が分岐する要衝の地であった。宿場は南北両町で構成され、北町は中世以来中通りと会津を結ぶ要地で、天正の末～慶長初めには宿駅的な機能を果たしたと思われる。南町は慶長６年（1601年）以後、小沼貞長らによって街づくりが行われ、慶長13年（1608年）に町割りが完成した。江戸時代の宿場の使命は、幕府の定めた多くの特権的な通行を保証することであり、その機能は運輸・通信・休泊を主としている。そのために、人や馬を用意して宿場間を次々に継ぎ送るとともに、通行者に応じその休泊施設をも提供した。この宿場には、参勤交代及び幕府が認めた公用旅行者が宿泊したり、休憩するための「本陣」という特別の施設（旧家が担う）が設けられていた。本宮にもその本陣はあった。

本宮村は、南町が創設されてから北町・南町双方に本陣・問屋が置かれ、宿場町として発展する。やがて、商品流通・貨幣経済発展に伴い、南達地方の商業の中心＝在郷町としての賑わいを見せる。残っている記録によると、享保８年（1723年）の時点で、北町１９２軒のうち町屋１５５軒、在郷３７軒、南町２０６軒のうち町屋１６２軒、在郷４４軒である。当時の奥州街道の中では、町屋数南北合わせて３１７軒は大宿駅であったといえる。

大部後になるが、文政７年（1824年）に本宮は郡山と一緒に「町」への昇格が藩から認められた（須賀川は既に昇格していた）。他地方との商取引が拡大する中で、「村」のままでは融通に何かと差支えるので、町の呼称を許可して欲しいと願い出ていたのであった。

江戸時代も幕末に入ると、東北地方は天明の大飢饉、さらには天保の大飢饉があり、そんな中で年貢を巡っての百姓一揆が勃発し、また藩の財政は窮乏してゆくなどの状況が展開する。そして、ついに討幕を目指す官軍との戊辰戦争で会津藩を始め二本松藩も激しい戦いの末、官軍に敗れる。幕藩体制は終わりを告げ、世は明治時代となる。

明治新政府は、次々と改革の手を打って出るが、明治４年（1872年）に一挙に藩体制を廃絶する廃藩置県を断行する。この時点では、福島県（第三次・中通り）・平県・若松県があったが、明治９年（1876年）に合併されて現在の福島県が誕生した。この過程で、明治７年（1874年）に福島県（第三次）は、改正地租法施行に伴い、行政区画を15区画に分け、安達郡は第７区（針道）・第８区（二本松）・第９区（本宮）と定めた。そして、第９区には三つの戸長役場があり、その管轄の下に各村があった。その状況は以下の通り。

・本宮戸長役場：本宮村・玉井村・大江村
・荒井戸長役場：荒井村・青田村・仁井田村・岩根村・関下村
・白岩戸長役場：高木村・白岩村・糠沢村・和田村・長屋村・稲沢村・松沢村

その後明治政府は、明治21年（1888年）に「市制町村制」を、さらに明治２３年（１８90年）に「府県制郡制」を施行した。これが、戦後昭和22年（1947年）の「地方自治法」公布まで続くことになる。政府は町村制実施に伴い、町村合併を推進した。その結果、

・本宮町：本宮村単独で町に　　・岩根村：岩根村・関下村
・荒井村組：荒井村・青田村・仁井田村　　・和木沢村：和田村・高木村・糠沢村
・白沢村：白岩村・長屋村・稲沢村・松沢村

が新しく誕生した。しかし、荒井村組は明治28年（1895年）になって分離・独立する。

最後に、昭和も戦後になってだが、昭和28年（1953年）に「町村合併促進法」が公布され、南達方部でも合併が進められた。その結果、昭和29年３月をもって本宮町・荒井村・青田村・仁井田村の合併が実現する。続いて、和木沢村の高木地区が本宮町に合併する動きとなり、昭和30年に合併が決まる。そして、本宮派と喜久田派とに分かれて対立していた岩根村も昭和31年に本宮町へ合併することが決まり、新しい町づくりがはじまったのである。そして平成に入っての合併促進の中で、平成19年（2007年）に本宮町と白沢村の合併が実現し、現在の本宮市が誕生したのである。今回はこれまでとする。

北海道　登頂９山、登山口確認３山　マイカー一人旅

【今回の行程及び山の概要】

（百は日本百名山、◎は日本二百名山、○は日本三百名山、数字は標高）

○フェリー往復２泊、北海道マイカー車中９泊　計 11 泊 12 日

【その１　余市岳・暑寒別岳　前号に掲載】

①7 月 11 日（土）自宅➔新潟港発 1200。新日本海フェリー➔

②　　12 日（日）➔小樽港着 0430。余市岳（○よいちだけ 1488m）

③　　13 日（月）暑寒別岳（◎しょかんべつだけ 1492m）

【その２　以下本号に掲載】

④　　14 日（火）移動

⑤　　15 日（水）天塩岳（◎てしおだけ 1558m、北見山地最高峰、士別市、滝上町）

⑥　　16 日（木）ニセイカウシュッペ山（○ 1883m、上川町）

同日　　石狩岳（◎1967m）登山口確認

同日　　ニペソツ山（◎2013m）登山口確認

⑦　　17 日（金）カムイエクウチカウシ山（◎1979m）登山口確認

⑧　　18 日（土）オプタテシケ山（○2013m、美瑛町、新得町）

⑨　　19 日（日）芦別岳（◎あしべつだけ 1726m、富良野市、南富良野町、芦別市）

⑩　　20 日（月）北海道駒ヶ岳（◎ほっかいどうこまがたけ 1131m、森町、七飯町、鹿部町）

同日　　大千軒岳（○だいせんげんだけ 1072m、福島町、松前町、上ノ国町）

⑪　　21 日（火）狩場山（○かりばやま 1520m、島牧村、せたな町）

同日　　小樽港発 1700。新日本海フェリー➔

⑫　　22 日（水）➔新潟港着 0915。➔自宅

前日の暑寒別岳山行は長時間を要したこと、クマとの遭遇により疲労感が大きかったことから、14 日は休養と移動日とした。

④14 日（火）道の駅「田園の里うりゅう」～移動

ゆっくりと８時過ぎ起床、曇り、雨の心配はなさそうだ。テーブルのあるところでお湯を沸かし牛丼と缶詰の朝食にする。雨竜米ソフトクリームを食べながら地図を見て次に登る山を検討する。

北海道のこの場所まで来ると旭川市に近く、当初予定の渡島（おしま）半島に戻るよりも北見山地の最高峰天塩岳に近いことが分かった。途中深川市で全自動のコインランドリーを使い洗濯する。店には誰もいなかったので地図を広げ、ルートや途中の温泉を探す。近くのスーパーで食料と板氷を購入する。

白い雲の浮かぶ青空の下、道央道深川 IC から旭川紋別道比布（ぴっぷ）北 IC で降りて愛別町協和温泉に立ち寄る。14 時過ぎ、「きのこの里」愛別町特産の 3 種のキノコ（シイタケ、マイタケ、エノキ）が入ったきのこラーメンは美味しかったがしょっぱかった。温泉に入り、すっきりして天塩岳登山口を目指す。

16 時過ぎ、トイレと水場の設備もある、2 階建て天塩岳ヒュッテ（無人の小屋）に着く。北海道内ナンバーの車が 3 台あった。すでに小屋の 1 階では女性のみの 10 人くらいが三密を全く気にせずに声高に宴会（?）をしていた。

食事の準備をしていると足立ナンバーの 10 人乗りワゴン車がやってきてドライバーを除く、中・熟年の男女 9 人がヒュッテ 2 階に入っていった。東京の山のクラブのメンバーとのこと。緊急事態宣言が解除されたとはいえ大丈夫かなと思った。翌日は前天塩岳コースを登り新道コースを下ることにし、中華丼と缶詰で夕食にし、マイカーで早々に就寝する。

⑤15 日（水）天塩岳（◎1558m）

4：30、朝食を摂らずに出発。東京グループは夕方の苫小牧発のフェリーに乗るとのことで所要時間の短い新道往復とのこと。

自分は前手塩岳コースを行く。途中旧道（沢コース）分岐のところで標識が明確でなく迷って 10 分ほど時間をロスする。何人も間違えているようで、踏み跡が濃かった。6：20 パンと牛乳を食べていたらガスが降りてきた。徐々に急坂になる道を登る。獣臭のするところがあった。

7：12、前手塩岳分岐着。ガスが濃くなりカッパの上下を着る。前手塩岳（1540 m）に登っても眺望は得られないと思い右方向へ迂回路を進む。7：40、前手塩岳山頂からの下山路との合流点で休憩する。ハイマツなどの低木や草が水を含んでいるので濡れる。さらに下ってから鞍部に至りガスで眺望はないところを登って行く。

山頂手前で逆コースの人と短いあいさつを交わしすれ違う。手塩岳下山後、あとで分かることだがＴさんだった。

8：45 手塩岳山頂着。所要 4 時間 15 分。天気がよければ表大雪の山々が見えるはずだが眺望は得られない。眼下の円山（1433m）や西手塩岳（1465m）、三角屋根の手塩岳避難小屋は見えてきた。振り返ると先程通ったルートも見えてきて、前手塩岳は山頂を含む半分はガスがかかっていない。陽が差してきて温かいので大雪山の山並みを是非みたいと思い、パンをかじりながら待つ。

1 時間待ったが大雪方面の雲はとれず眺望は断念する。

9：45 下山開始、手塩岳避難小屋まで下り、緩やかに登り返して円山山頂 10：45。自分がたどってきたコースが良く見える。やがて笹と樹林の中の道を下り旧道との連絡路を経由し 12：30 登山口の手塩岳ヒュッテに着く。

山頂での1時間の休憩を含み。8時間の山行を終える。

山頂直下ですれ違った男性が引き水の蛇口からペットボトル何本分も水くみをしていた。煮沸して使うとのこと。自分は明日はニセイカウシュッペ山に登る話をしたら、彼は林道が通れないと思っていたとのこと。自分が上川町役場から仕入れた情報（ゲートまでのルートやカギ番号）を話すと彼も明日登ることになった。

そこで互いに名乗り、彼は九州から軽乗用車できて（敦賀からフェリー）、日本200名山と300名山を登っているTさんであることが分かった。登山口での再会を約し別れる。

コンビニで食料のほか缶ビール、クーラーボックスの板氷などを買い、ちゃんとした店で食事をしたいと思ったが、休業していたり、夕立みたいな強い雨が降ってきたり、丁度しなかったので、結局パンの残りで済ませてしまった。

国道273号の中越（なかこし）から古川林道に入りゲートにたどり着いたらカギはかかっていなかった。ゲートから約13ｋｍ、未舗装だがよく管理されている林道をゆっくり進み、終点の登山口の20台くらい可能な駐車場に着いたのが16時を回っていた。Tさんが先着していた。

明日の登山と寝る準備をしてから、両者の車の間で食事を一緒にすることにした。自分の持参した香取線香を二つ焚き、まずは缶ビールで乾杯した。自分は缶詰、ご飯と牛丼二袋を湯煎して栄養不足を補った。Tさんはコンビニおにぎりだった。

Tさんは団塊世代末期の生まれで、北海道には7/5に入ったとのこと。日本百名山は既に終えていて今回は200と300名山を登り、北海道の後はフェリーで青森に渡りいくつか登って、陸路九州の自宅にはお盆前までに帰るとのこと。本当の（？！）趣味はモーターパラグライダーで、着陸に失敗し両足大腿と右足膝に大けがをして金具が入って入るとのこと。7か月の入院とリハビリのあと、再び復帰すること（空を飛びたくて）を目指して山登りをしているとのこと。世の中にはすごい人がいるものだとつくづく思った。夜中、満天の星だった。

⑥16日（木）ニセイカウシュッペ山（○1883m）

4時起床、駐車場の端に鹿の親子がいた。朝食は摂らずに5:00登山届を書き、Tさんは半袖で自分は朝露があるためカッパの上着を着けて、Tさん先行で出発する。登山口の標高は既に1100mある。

なだらかな西尾根の歩き始めはダケカンバの大木の下を行くが、山中に入り込むこともなく割と単調で直線的に標高を稼いでいく。Tさんはいろんな話をしながらも立ち止まることもなく進んで行く。自分は追いついていくのがやっ

と。雲で眺望が得られないため展望台（1533m）でも休まない。

山頂かと思った山の北側には雪渓が残っていて登山道の左右の急な斜面にお花畑が広がっていた。霧の中に浮かぶ黄色やピンクや白い花がなんとも麗しい。

大槍というピークは山頂でなく山頂はさらに左に回っていく。手前右手の前衛峰（？）には踏み跡があり、その先には怪獣ゴジラに似た岩峰に雲がかかっている。展望台までの割と単調だった景観と全く異なる高山の雰囲気だ。

山頂には 7：15 着。雲海の上に表大雪の山々がきれいに見えた。今回北海道に来てこの展望の良さは初めてだ。右手から黒岳、旭岳、白雲岳、忠別岳、化雲岳、トムラウシ山・・・・。Ｔさんにスマホで写真を撮って貰う。Ｔさんは自身や景観の写真は撮らない主義とのこと。あの世には持って行けないからという。

ガイドブックのコースタイムは 2：40～2：50 となっているところを 2：15 で着いた。花の名や山の同定にもあまり興味を示さないＴさんはほとんど休まなかった。

雲海に浮かぶ遠くの高山を遠望し、近くの低山を見下ろしながらの天空での朝食はなんともいえない壮快な気分だ。自分はもっと山頂からの景観に浸っていたかったが、Ｔさんはそろそろ下りましょうかとのこと。30 分休んで 7：45 下山開始。

下山中、若い女性のみのグループや中年男女のペア、女性単独行などが登って来た。休日でなくとも人気の山らしい。下りでＴさんが何度かバランスを崩して転ぶ。以前のケガで、筋肉を何本か切っているのと右足の曲がり具合が十分でないため踏ん張りが効かずバランスが取りにくいとのこと。痛みもあるらしい。

1 回だけ休み 9：45、登山口着。往復 4：45 の山行だった。休憩を入れての時間だからすごい。

Ｔさんは次の日は自分が既に登った暑寒別岳、その次の日は十勝連峰のオプタテシケ山に登るとのこと。自分は、前日Ｔさんが話していたカムイエクウチカウシ山（愛称カムエク）・・・Ｔさんは数日前挑戦したが、時間切れで日帰り登山を断念したこと、・・・の登山口確認のための下見をすることにし、明後日のオプタテシケ山を同行させて貰うことにした。11 時自分が早く出発。

上川町中心部まで戻り層雲峡方面に南下する。目指す中札内（なかさつない）村は帯広のさらに南に位置する。層雲峡温泉街の中心部Ｒ273 号沿いのコンビニで弁当を買い車中で食事する。

2011 年 9/30 に妻と層雲峡の宿に泊まり、10/1 ロープウェイとリフトを乗り継ぎ黒岳（1984m）に登り、旭岳（百 2291m）まで縦走しようと試みたことがあった。しかし黒岳山頂は猛吹雪で断念したことを思い出しながら層雲峡温泉街を走り抜ける。（ねじりはちまき 154 号、155 号）

帯広までの間のＲ273 号（糠平国道）は立派な道だが走る車は少ない。

Ｔさんからアドバイスされていた石狩岳（◎1967m）とニペソツ山（◎2013m）の登山口を確認した。Ｔさんは雨にたたられ、ニペソツ山の山頂を踏んだかどうかハッキリしないと言っていた。

帯広広尾道中札内 IC で降りて道の駅で教えて貰いカムエクの登山入口（幌尻覆道ゲート）に着いたのは 18 時を回っていた。暗くなる前に着けて良かった。30 台以上置ける駐車場に車はない。

川がすぐ近くを流れ、山間にあり、樹木に囲まれた駐車場は湿気が多く虫が寄ってくる。蚊取り線香を二つ焚いて食事する。ビールがうまい。

⑦17 日（金）カムイエクウチカウシ山（◎1979m）登山口確認

4 時起床、天気は良さそうだ。ラーメンの朝食を食べ、5：20 ゲートを越えて出発。道路は中央線も引いてある舗装されていて広い道だ。土砂崩れで寸断されている工事現場を迂回して進んで行くと熊の痕跡（糞）や自転車の踏み跡があった。

7 時前、二つの川（沢）が出合う広い河原に面したところに折りたたみ式の自転車が置いてあった。登りが急なために置いていったのだろうと思い、進んで行くと大きく左にカーブする幅 8m くらい、長さ百メートルを超える立派な橋に出た。橋の先に踏み跡があり進んで行くと道が消え、左側の川に降りていく踏み跡があった。河原に降りて、ガイドブックに書いてある目印のテープを探したが見つけられなかった。

今回の下見はここまでと思い石に腰掛けてパンをかじる。橋を渡って戻り、さっきは通過してしまった、自転車の置いてある河原に降りて見渡してみると、先程休んだ川（沢）とは別の川の合流点は広い河原になっていて、右岸（上流から下流に向って右）、自分の位置からは前方左手にピンクのテープが見つかった。

ガイドブックの説明とようやく合致した。先のルートは登山のルートではなく釣り人の踏み跡だったと思い直す。

広い河原には幾筋の流れがあり、渡れそうなところを何本か徒渉し樹木がまばらにある、大小の石と砂、流木のある中洲まで行ってみた。右岸には目印が何個か見つかったがこれ以上進むには徒渉用の靴が必要だった。

9 時、下見をやめて車のところまで引き返した。10：30 着。

車で 10 分ほど戻ったところの「日高登山センター」に立ち寄ってカムエクの情報を仕入れた。カムエク山行については、中札内村としては奨励はしない立場だ。完全に自己責任での入山となる。それでも応対してくれた若者は丁寧に説明してくれて、日高の山々のビデオも見せてくれた。日高山地の模型などもありカムエクの山容のイメージをつかむことに役だった。

12：50 発、翌日Ｔさんと一緒に登ることにしていた十勝連峰のオプタテシケ

山の登山口に向けて移動する。道東道に乗りトマムICから富良野を目指す。富良野は広い。南から南富良野町、富良野市、中富良野町、上富良野町と4つの自治体がある。上富良野町のラベンダー園に立ち寄る。

富良野市の山部（やまべ）で、明後日に登る芦別岳の麓にある太陽の里に立ち寄り、登山口を確認し、「国立大雪青少年交流の家ユースピア大雪」をナビに設定し、白金温泉を通過し、美瑛町役場から送って貰った登山口入口の写真の風景を探しながら車を走らせたら通り越してしまったらしい。Tさんに電話してみたらつながり、涸沢林道のゲートへ至る「美瑛富士→」の標識のあるところでTさんが待っていてくれた。ゲートのカギはかかっていなかった。舗装された狭い林道の終点が駐車場だった。車が数台あり、今し方下山してきたそれぞれ単独行の2人が立ち話していた。一人は茨城の人でもう一人は聞き漏らした。Tさんも加わって話していたら、Tさんと同学年、昭和24年度の生まれだった。茨城の人はオプタテシケ山はぬかるんでいて悪路で山頂での休憩も入れて13時間かかったということ。また福島県の山（山と渓谷社「分県ガイド」）も登っているとのこと。震災の際に避難地域になった山のことを聞かれた。

夕食はTさんと一緒の、2日前と同じように互いの車の間に蚊取り線香を焚き、ビールを飲みながらの楽しい話で盛り上がった。

⑧18日（土）オプタテシケ山（○2013m）

4時起床。食事は摂らずに4：30出発。入山届に記帳し、登山道に入ると急登となり、ぬかるみのある湿っぽいアカエゾマツ林の中を登り、岩石が多くなってくる。「天然庭園」の標識のところではハイマツやエゾマツ、大きな岩の景観が素晴らしい。5：48着、立ったまま小休止、10分も休まずに出発。

樹林を抜け出し、森林限界を超えると斜面に高山植物の花が咲いている。雨水でえぐれた道を登り、薄汚れた雪渓を渡っていくと7：05美瑛富士避難小屋着。ここで朝食にする。晴れていて、これから通過する石垣山（1822m）が左手に見え、右手には美瑛富士（1888m）の大きな山体が迫っている。目指すオプタテシケ山はここからはまだ見えない。狭いテント場にいくつかテントが張ってあった。7：25発、石垣を積んだような道を登って行くが石垣山山頂は踏まないで進んで行く。振り返ると美瑛富士よりもさらにボリュームのある美瑛岳（2052m）が見えているがその先の十勝岳（百2077m）は見えない。オプタテシケ山手前のベベツ岳（1860m）に向う道からは目指すオプタテシケ山に至る登山道が青空下の稜線上に見えている。

ベベツ岳からはオプタテシケ山西峰との間のコルに向って急な岩場を下って行く。きつそうに登ってくる人たちとあいさつを交わす。

コルでも休まずに西方に向っての急登を登る。足場はそんなに悪くない。Tさ

んに付いて、自分では右足・左足を 1（右）～（左）、2（右）～（左）、3～・・・とリズムを取り、百まで数えて繰り返しながら登って行く。

西峰からはまた下り、大きな山頂手前の迫力ある壁が立ちはだかっている。壁に見えた岩を縫って登り、9：23、360 度展望のオプタテシケ山頂に着く。約 5 時間、天候に恵まれた山行だった。山頂はそんなに広くない。登山者は 3 人。

2012 年の 7 月に妻と二人、十勝岳に登った時も天気が良く、美瑛岳、美瑛富士は確認したが、その時は意識していなかったオプタテシケ山。十勝岳山頂から、いつか十勝連峰縦走をしてみたいと思ったその北端のオプタテシケ山に登ることができた。

十勝岳は山体の大きい美瑛岳の先に、良いとこ取りの山頂がすくっとそびえていた。反対側には王冠のように見えるトムラウシ山（百 2141m、2012 年 8 月、単独行）はすぐに分かった。その左側に旭岳を盟主とする大雪の山々が連なっている。カムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）の山々を眺めることができた。

何時間でも楽しんでいられるが、次の山行が気になるＴさんはソロソロ降りましょうかという。9:50 下山開始。美瑛富士避難小屋 11:35 着、14:10 登山口着。9 時間 40 分の山行だった。自分一人だったらもっともっと時間を要したろう。Ｔさんに感謝する。

翌日は富良野盆地の南西に位置する芦別岳をＴさんと登ることにしていたが、自分は洗濯したいと思ったので別行動にし、芦別岳登山口で合流することにした。登山口のある山部にはコインランドリーがなく、10km 戻った富良野駅前のコインランドリーは全自動でなく夜遅くなってしまうと思ったので洗濯はあきらめ、山部自然公園太陽の里ふれあいの家近くの登山口に向う。山着でなく普段着で代用すれば良いと思った。Ｔさんと 3 度目の夕食をともした。

⑨19 日（日）芦別岳（◎あしべつだけ 1726m）

登山道は新道コースと旧道コースがあり、コースタイムとしては新道往復が 8 時間弱、旧道コース～新道コースの周回の場合は 9 時間～11 時間。Ｔさんと相談して新道コースの往復と決める。

休日好天のためか、気がつかない間に駐車場には 7，8 台が駐まっていて、中年の男女グループ、若者男子グループなどが出発していく。登山届けに記入し、鹿よけの柵を開閉して 5:10 出発。展望は利かないが木漏れ日の気持ちの良い道を登って行く。6:53 旧道との連絡道路の分岐点鶯谷（うぐいすだに）に着、休まずにやせた尾根道を通り、半面山（はんめんやま 1377m）7:25 着で小休止。自分たちの前に出発した中年の男女グループが休んでいた。ようやく目指す芦別岳が見えてきた。7:33 発、一端下って池塘のある湿原を通り、急登を登り返し雲峰山（うんぽうさん 1560m）8:08 着。芦別岳山頂が間近に見え、北側の旧道コースの

方角には大岩稜地帯が見える。8:15 発、最後のザレた急斜面を登り、8:43、岩塊の芦別岳山頂着。

デコボコの山頂は 360 度の展望があり、広くはない。周りの山々を従えて高度感のある山頂だ。岩の間から茎を伸ばしたリンドウ（?）が咲いていた。先行した若者グループが 10 人ぐらい、食事や隣りのピークで写真撮影などをしていた。

南に連なる山々の奥に一際目立つ姿の良い山があり、Ｔさんが明日登る予定の山、夕張岳（◎ゆうばりだけ 1668m）だった。自分は次回の山行だ。富良野盆地を挟んだ東･北側には前日に登ったオプタテシケ山を含む十勝連峰が薄い筋状の雲の中に連なっている。

食事をして 9:20 下山開始、往路を戻る。10:40 鶯谷分岐小休止、12:15 新道登山口着。所要時間約 7 時間、参考コースタイムよりかなり短縮している。

夕張岳登山口まで行くＴさんとはここでお別れする。自分は渡島（おしま）半島の山（駒ヶ岳、大千軒岳、狩場山）に登るため長距離の移動が待っている。

Ｔさんは東北の 200、300 名山はこれからというので、近くに来たときは自分に連絡して欲しい旨念を押す。これまでの経験から、初めての山の登山口へのアクセスは地元の人のアドバイスがありがたかったので。

北海道駒ヶ岳登山口は大沼公園近くなのでナビで探すと表示されたのは、350km 以上、5 時間以上だった。自分の住居と東京よりも 100km 以上も離れている。日が暮れる前には着きたいと思った。13 時前、Ｔさんより先に出発する。

道東道占冠（しむかっぷ）IC～千歳恵庭 JCT～道央道～苫小牧からは左手に津軽海峡、室蘭からは左手に内浦湾を眺めながら進んで行く。

森 IC から大沼公園に向っていくと左手にどっしりしたボリュームのある駒ヶ岳が迫ってくるように見え、ワクワクする。この山は眺める方角によって全く別の山に見える。登山口に行く前に、コンビニに寄る。標識に従い舗装された車道を、ところどころに対向車と交差できるようになっているロータリー（?）を通って行くと、少し広くなっているところが終点のトイレのある六合目駐車場（480 m）だ。18 時半前着、間もなく日が暮れる。5 時間半かかった。

（六合目駐車場までは 2013 年 8 月 31 日に先輩のＫ夫妻と妻の 4 人で来たことがあり、雨混じりの風の悪天のため登りを断念した山だった。）

六合目から見る駒ヶ岳は、夕暮れ時の青空を背に黒いシルエットとなって、剣ヶ峯が右に湾曲した尖塔のように突き上がり、対照的に右手には丸みを帯びたピークを持つ馬ノ背が延びている。1 時間ほど前に西側から見た眺めとは全く別の山のようだ。火山灰（砂）のためサンダルでは汚れてしまうので、長靴を履いて食事。就寝。

⑩20 日(月)

○北海道駒ヶ岳（◎ほっかいどうこまがたけ 1131m）

パンとお茶とカッパを入れた小さなザックを背負って 5:05 出発。朝方地元の車が 1 台登って来ていた。広い赤茶けた登山道は火山砂礫のためザラザラして歩きにくく、大雨などの影響でできた溝や穴がある。

振り返ると下界は雲の下で、大沼湖は見えない。上部は雲一つない快晴だ。登山標識があり「頂上まで○○○m」と書いてあるが、火山活動活発化により山頂の剣ヶ峰（1131m）までは登ることができず、馬ノ背（900m）を頂上として表示されている。

道の傾斜が緩くなると 6:00 標識の立つ馬ノ背に着く。馬ノ背からは樹木のない広大な火山礫地帯を見渡せる。正面に火口の凹地を挟んで砂原岳（1108m）、左手に岩でゴツゴツと鋭く尖った剣ヶ峯（1131mここがホントは山頂）・・・王冠のような形をして、オプタテシケ山から見たトムラウシ山に似ていると思った。右手には丸みを帯びた隅田盛（892m）などが見える。かつては馬ノ背を中心にして自由に登ることができたとのことだが、今は「立ち入り禁止」のロープが張ってある。ベンチでパンを食べていたら一人の中年登山者が登って来て、「おはようございます！」と声を掛けたが反応がなかった。見ていると、ロープをまたいでずんずんと進んで行った。しばらくすると砂原岳方向に歩いて行く姿を認めることができた。こういうこともありの山らしい。注意深く見ると剣ヶ峰方向にもうっすらとした踏み跡があった。

少し心が動いたが、その日はもう一つの山（大千軒岳）を登る予定にしていたので、「禁」を犯さずに済んだ。下山中も雲海のため大沼湖は見えなかった。

7:20、登山口着。2 時間 15 分の北海道駒ヶ岳山行を終える。

7:45 発、松前半島の中心部にある大千軒岳に登るため、登山口の一つ、福島町千軒を目指す。知内（しりうち）町役場をナビに設定し、福山街道（R228 号）の海岸沿いに進み、ＧＳで道を尋ねながら燃料を補給し、住川林道に入る手前で居合わせた住民の人に道を尋ね、未舗装の林道を 7ｋｍほど進んだところの奥二股川出合の駐車場、登山口（220m）に 9 時半に着いた。月曜日ということか、車はない。

○大千軒岳（○だいせんげんだけ 1072m）

入林届に記入し、配置してあった案内図を貰って 9:45 出発。A4 の案内図は参考コースタイムのほか、注意すべきところは写真などもあり親切な資料だった。ただ歩くのに精一杯で十分読みこなせなかった。

このコースを選んだのは、松前藩の知内川砂金採掘事業に従事していたキリシタン信徒 106 人が 1639 年に斬首され、毎年 7 月（最終日曜日）に金山番所跡

（登山道途中にある）で殉教ミサが行われるとガイドブックの一つに書いてあったことによる。別の新道コースは短時間のコースのようだ。

このコースは知内川本流沿いに作られており、最も古くから登山道として利用されているとのこと。天気が曇りで、樹林の中を行くこともあり、眺望のない湿っぽい山だ。

11:30、樹林に囲まれた金山番所跡に着く。草が繁茂した小広い平地には説明板と石を集めた台の奥に丸い岩があり、そこに立っているはずの十字架は取り外されていた。説明板によると修理中とのこと。7月末の殉教記念ミサ迄には直るのかなと想像した。

樹林帯を抜けるとさらに急登になり、高木限界を超えると緩い斜面の千軒平（960m）に13:25着。腰までの笹の道を進み、斜面に咲く高山の花々が迎えてくれた。曇天のためひっそりとした感じだ。稜線に出ると　右側の山頂に向う道の両側もお花畑になっていて、右手少し平場のところには高さ2mを越えるステンレス製の十字架が立っていた。

山頂に至るお花畑には薄い霧がゆっくりと流れる中、黄色いエゾカンゾウ（ニッコウキスゲ）や白色～淡紅色の花穂をつけたイブキトラノオなどが群生していた。それまでの苦労が報われる。300名山に選定されている理由がようやく納得できた。

13:55、ほぼ参考コースタイムの約 4 時間で山頂に着く、ガスで眺望は得られない。遅い昼食を摂り休憩し、14:15下山開始、往路を戻る。17時頃、もう少しで林道に出るはずの沢の徒渉地点でテープを見失い、踏み跡らしきところを登ったりして道に迷い冷や汗をかいた。日暮までにはまだ間があるが、山峡の樹林帯では日没が早い（案内図には「日没時間」が記載されていて 7/1 では日没が19:25だが登山口は17:30となっていた）。林道に出て駐車場所に着いたのは17時30分を過ぎていた。熊にも人間にも遭わない約8時間の山行を無事終える。

この山には砂金採掘事業の遺構が何本もあるとのことで、金山番所跡以外にも、登山道や徒渉地点などに長い人間の営みの雰囲気を感じた山だった。

18 時前薄暗い駐車場を出発し、明るい福山街道に出て広い待避所に車を停めて、翌日登る狩場山登山口までに行くにはどのルート、福島町まで南下して「日本海側」を北上すべきか、朝来たルートを引き返し大沼公園から道央道を経由して島牧村に行くべきか、着替えをしながら考えた。距離的には遠くなるかも知れないが時間的には高速道路を経由するルートが良いだろうと判断し、まずは大沼公園近くの森ICを目指す。

右手の津軽海峡の海に沿って北上し、函館湾に入ると対岸の明るい函館山が島のように見える。途中北斗市上磯の食料品店でカツ丼ほかを調達し、バナナとパンを食べながら道央道を経由し北上する。長万部（おしゃまんべ）IC で降り、

黒松内（くろまつない）町を通る。車中泊できる公園を探しながら運転していたらとうとう穏やかだが淋しげな日本海に出た。車を停めて道路地図を見たら「よってけ！島牧」という道の駅のあることが分かった。登山口のある賀老高原（賀老の滝）まではさらに20ｋｍ近くありそうなのでここで車中泊することにした。

23:30、千軒岳登山口を出発してから200km超、5時間半かかった。道の駅には車が数台駐まっていた。1台からは男性二人の談笑の声が聞こえた。外灯の明かりが弱くなっているところに車を停め、ようやくカツ丼にありつき、いよいよ明日が最後の山登りだと思いながら0:30就寝。

⑪21日（火）狩場山（○かりばやま1520m）

4時に目が覚め外に出てみると、夜明け前で、黒いシルエットの建物と山の先に、青空に浮かぶ雲にオレンジ色や紫色、水色が映って朝焼けがきれいで写真に撮った。

4時半過ぎ、賀老の滝を目指し出発。千走川（ちはせがわ）温泉を経て賀老高原キャンプ場の先の20台は置ける千走新道コース登山口駐車場に5時半前に着く。ブナ林に囲まれた登山口（700m）には「狩場登山道入口」の少し傾いた木柱があり、その脇の大きな「狩場山登山の注意事項」の説明板には、熊に注意とも書いてある。どんよりとした曇り空で、先日の暑寒別岳でのクマとの遭遇のこともあり、一人で登ることに気後れがして、誰か来ないかなとパンを食べながらモタモタしていたら、軽のジープに乗った若者がやって来た。話したら、何と福島県県南地方の若者で、もちろん福島のナンバーだった。彼はお湯を沸かしてラーメンを作り始めたので、追いつかれるのを前提に自分は先行して出発することにした。6:40発

少し歩くとブナ林はなくなり樹高の高くないダケカンバの林の中を登って行く。1合目、2合目・・・と表示がある。若者には早く追いついて貰いたいと思ったが樹林帯を抜けて東斜面の残雪のところでも追いついてこない。真駒内コース分岐を越え、背の低い枝が曲がりくねって歩きにくいダケカンバの尾根を歩いているときにようやく追いついてきた。若者に先行して貰う。さすがにヒョイヒョイと身が軽い。南狩場（1464m）を越えてなだらかな細い稜線上からは右斜面が開けていて狩場山が見えるはずだが流れる雲に覆われている。

左側手前に岩場があって先が見えないところの右側を若者が通過しようとしたとき若者が急に立ち止まり引き返してきて自分とぶつかりそうになった。クマだと低い声で叫んだ。自分は姿を見なかったが、またかと思いながら冷やっとして立ち止まる。赤毛色の大きいヒグマだったとのこと。彼は携帯のＧＰＳ機能を見ながら、山頂まで距離にして500m、標高差50m、と残り惜しそうに言った。自分は即座に登頂意欲をなくしていたので引き返すと言ったら、若い彼は別

の機会＝多くの登山者が登っている天気の良い休日などに再挑戦すると言った。自分としては、狩場山は登ったことにすると決めた。(「300 名山達成」とは言えなくなる？)

8:50 下山開始、4 合目くらいまで下ったら雨になってきた。カッパの上下を身に付け、10:30 に登山口に着く。ちゃんとした雨に降られたのは今回の北海道山行中はじめてだった。

明日は大千軒岳に登るというＳ君と、互いの山行の無事と健闘を声掛け合い、福島県内のどこかの山でまた会いましょうと言って別れ、11 時前、自分は日本海沿いに小樽港を目指す。

寿都（すっつ）町の弁慶岬あたりから時々雨風が強くなり、寿都湾の風力発電の風車が勢いよく回っている。蘭越（らんこし）町の道の駅シェルプラザ・港に立ち寄り、積丹半島の付け根の泊原子力発電所が見える岩内（いわない）町から内陸に入り北上し、旧会津藩士が入植した余市（よいち）町を抜けて小樽港に着いたのは 15 時半を過ぎていた。距離は約 150ｋｍ。

小樽 17:00 発新潟行に間に合った。小樽の町で買い物をする時間まではなかったので、フェリーターミナルで、北海道記念にガラスの中に気泡が入っているグラスを買い求め、らべんだあ（往路の船と同型）に乗船する。

お風呂でゆっくりと汗を流し、レストランでは、当初の思いよりも多い 9 山に登ることができたことに感謝して、一人生ビールで乾杯し、ちょぴっと贅沢な食事を楽しんだ。

⑫22 日（水）➔新潟港着 0915➔自宅

予定通り新潟港に着き、自宅を目指す。磐越道を福島県内に入ったら眠気を催し、危ないと思ったので、磐梯河東 IC で降りて、猪苗代町役場向かいの「くいものやラ・ネージュ」に行ったら 10 人ほどが並んでいた。久しぶりのざるそば・ミニヒレソースカツ丼セットはボリュームがあり、福島に帰省したことを実感した。

北海道の日本 200 名山と 300 名山は 16 山残っていたが、今回頑張って 9 山登ったので、残りは 7 山。カムエクなどの大物が残る。次回山行のために、さらにブリキ缶 500 円玉貯金に励むことにする。

北海道山行走行距離 2260km 超の山旅を無事終える。

令和２年９月　ＮＯ９４　　アンチ・エイジング　山旅遊人

<会社近況>

９月に入りました。今年の夏は酷暑でしたね。そろそろ夏の疲れが出るころではないでしょうか。お体どうか大切になさって下さい。

酷暑の中にも秋の気配を感じることもあり、８月のある夜、暑くて眠れないでいるとコロコロコロ・・・と虫の音が聞こえてきました。コオロギでしょうか。君の出番はまだ早いんじゃないかい？と言いながら季節は少しづつ秋へと移っているのだなあと感じました。昼間はセミの声、夜はコオロギ。季節限定です。楽しみましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

防災の日☆9月１日

関東大震災により昭和35年に制定された記念日だそうです。昨年の台風の襲来も記憶に新しいですが、『災害の備えをもう一度』意識したいところです。ご家庭の非常持ち出し袋や非常保存食を確認したり、災害に遭った時はどう行動するかをご家族で話し合っておくのも大切ですね。

今はおいしい防災食もあり通販で揃えることが可能なので便利ですね。日頃からの防災意識を高くすることが必要なのかなと改めて感じる次第です。

常時入っているものに加えて、新型ウイルスも意識したマスクや除菌グッズなどの備えもあると、感染拡大防止になります。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

令和２年９月５日発行
有限会社　幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話　0243-44-3816

<後記>９月21日は敬老の日ですね。
今年はいつもと少し違う、新しい長寿の祝い方、敬愛のかたちになりそうです。長い間社会や私たちに尽くしてきて下さりありがとうございます、と伝えたいです。（ホシノ）